

出エジプト24章9－11節 「天の幻」

アウトライン

1A 青空のような御座

1B 地上に降りて来た天

1C 食事をする長老たち

2C 幕屋の型

2B ケルビムの上の御座

1C エゼキエル

2C ヨハネ

2A 天のすばらしさ

1B 言葉に言い尽くせない

1C 物理的

2C 聖書的

2B 苦しみを耐える力

3B きよめ

3A 天に入る

1B 上からの誕生

2B キリストの血による聖め

本文

出エジプト記 24 章を開いてください、今日は 9 節から 11 節に注目してみたいと思います。

9 それからモーセとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は上って行った。10 そうして、彼らはイスラエルの神を仰ぎ見た。御足の下にはサファイヤを敷いたようなものがあり、透き通っていて青空のようであった。11 神はイスラエル人の指導者たちに手を下されなかったので、彼らは神を見、しかも飲み食いをした。

1A 青空のような御座

1B 地上に降りて来た天

1C 食事をする長老たち

私たちは、今晩は「天の幻」を見ていきたいと思います。イスラエルの民は、シナイ山のふもとにいましたが、祭司と長老 70 人だけをさらに上に登ってくるように神が命じました。そして、そのところでこの光景を彼らは見ました。サファイヤを敷いたようなものがあり、さらに透き通っていた青空のようでした。神の御座がそこにあったのです。彼らは飲み食いまでしたのですが、そんなに近づ

いている彼らに対して神は彼らを滅ぼすことをなさいませんでした。これはまさに、彼らは天の幻を見たこととなります。

私たち人間には、究極の理想の世界に入りたいという思いを心の奥底で抱いています。平和と愛があるところ、不正のないところ、苦しみのないところ、悲しみや涙のないところ、そして何よりも死のないところを願っています。伝道者の書には、「**神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。(3:11)**」とあるとおりです。そして神ははっきりと、それが何であるかを教えてくださっています。私たちは特別な神秘的体験をしなくても、聖書によってはっきりと天を知ることが許されています。

それは、地上にいる者にとっては、火や雲、また恐ろしい角笛の音でありましたが、ちょうど乱気流を通り越した飛行機のように、それを通り過ぎれば、透き通ったガラスのような、まったく清い神の御姿を見ることができるのです。神は 70 人の長老たちに食事を取ることを許されましたが、それは聖なる神と交わる姿であり、神は私たちに、天において私たちと食事をするような交わりを与えたいと願っておられます。

2C 幕屋の型

そして神は、モーセに対して 25 章以降で幕屋を造るよう、その型をお示しになりました。「**幕屋の型と幕屋のすべての用具の型とを、わたしがあなたに示すと全く同じように作らなければならない。(25:9)**」とモーセに言われています。そして初めに教えられたのが、契約の箱です。神の戒めが書かれた石の板を入れた箱です。アカシヤという木で造りますが、純金で覆います。さらに、「**贖いの蓋**」を造りなさいと命じられます。それは純金で造られて、上にケルビムが二人翼を覆うようにして彫られます。

これらが実は、天にあるものの模型であることをヘブル人への手紙は教えています。「**その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。『よく注意しなさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。』(8:5)**」主がイスラエルの民にサファイヤのような形で天の前味を知らされたのですが、幕屋という地上にいける天の模型によってイスラエルの民に、天の栄光をお示しになられたのでした。

契約の箱も、黙示録で、神が最後の七つの災いを下される前に、ヨハネが「**その後、また私は見た。天にある、あかしの幕屋の聖所が開いた。(15:5)**」と言っています。

2B ケルビムの上の御座

1C エゼキエル

シナイ山のふもとで主がお見せになった、ご自分の御座の幻は、預言者エゼキエルが実に鮮やかに見えています。非常に神々しい姿です。1 章 22 節から読んでみましょう。

22 生きものの頭の上には、澄んだ水晶のように輝く大空のようなものがあり、彼らの頭の上のほうへ広がっていた。23 その大空の下には、互いにまっすぐに伸ばし合った彼らの翼があり、それぞれ、ほかの二つの翼は、彼らのからだをおおっていた。24 彼らが進むとき、私は彼らの翼の音を聞いた。それは大水のとどろきのようであり、全能者の声のようであった。それは陣營の騒音のような大きな音で、彼らが立ち止まるときには、その翼を垂れた。25 彼らの頭の上方の大空から声があると、彼らは立ち止まり、翼を垂れた。

この「彼ら」とは、ケルビムのことです。エデンの園で、いのちの木を守るために炎の剣を持っていたケルビムであり、そして贖いの蓋に彫られたケルビムであります。

26 彼らの頭の上、大空のはるか上のほうには、サファイヤのような何か王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。1:27 私が見ると、その腰と見える所から上のほうは、その中と回りとが青銅のように輝き、火のように見えた。その腰と見える所から下のほうに、私は火のようなものを見た。その方の回りには輝きがあった。1:28 その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。そのとき、私は語る者の声を聞いた。

ケルビムの上に神の御座がありました。腰の下は火のように見えた、つまり神の裁きがあります。けれども、それを通り過ぎるとサファイヤのような王座があるのです。さらに、輝きは虹のようであったとあり、それはノアに対して神が与えてくださった契約を彷彿させます。主は、必ず約束を守られる方です。

2C ヨハネ

そしてヨハネもこの光景を目にしました。まだ大患難が地上に襲う前の天国の情景を見ましょう。黙示録 4 章 2 節からです。

2 たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、3 その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。4 また、御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。5 御座からいなくと声と雷鳴が起こった。七つのともびびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。6 御座の前は、水晶に似たガラスの海のようなようであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。

御座の前は水晶に似たガラスの海のような、とあります。それがサファイヤの色に似たものであり合致します。そして御座そのものは碧玉や赤めのうのように見えます。そして御座の周りには同じように虹がありました。さらに、シナイ山においても、またエゼキエルが見た幻においてもそうです

が、「いなずまと声と雷鳴」が起こっています。

そして天のエルサレムの情景を見ましょう。黙示録 21 章 10 節からです。

21:10 そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。21:11 都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。

やはり、同じ輝きです。

21:12 都には大きな高い城壁と十二の門があつて、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあつた。21:13 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があつた。21:14 また、都の城壁には十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の十二の名が書いてあつた。

霊的に回復したイスラエル十二部族と、また教会を代表する十二使徒の名がこの都に刻まれています。18 節に飛びます。

21:18 その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。21:19 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイヤ、第三は玉髄、第四は緑玉、21:20 第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髄、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。21:21 また、十二の門は十二の真珠であった。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。

いかがですか、こんなにすばらしい、栄光の輝く都に私たちは招き入れられているのです。そして 11 節後半に戻ってください、御使いがヨハネにこう言っています。「ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。」なんと、これは私たち信仰者であり教会の姿なのです。近づけはたちまち滅ぼされてしまう神の栄光の中に、なんと私たちはすっぽり入れられています。神と人とが結ばれて、一体にされています！

2A 天のすばらしさ

私たちには、このようなすばらしい神の啓示が与えられています。それゆえ、私たちが魂の救いを受けたのであれば、この啓示の知識そのものを知らなくても、心の奥底で深く、悟っているのです。「見ていなくても、見ている」のです。使徒ペテロはこう言いました。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救い

を得ているからです。(1ペテロ 1:8-9)」

1B 言葉に言い尽くせない

1C 物理的

生きたまま、天の中に引き上げられた人々が聖書にはいます。エノクやエリヤがそうですが、一度、死んだかのように見えて、実は天に引き上げられた人もいます。使徒パウロです。彼は地上に戻って、天のすばらしさを次のように表現しています。コリント第二 12 章です。「無益なことですが、誇るのもやむをえないことです。私は主の幻と啓示のことを話しましょう。私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に・・肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです。・・第三の天にまで引き上げられました。私はこの人が、・・それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです。・・パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。(1-4 節)」

第三の天というのは、神の御座が存在する天です。第二の天は「空中」とも聖書で書かれているところであり、そして第一の天は私たちが目にする物理的な空です。多くの人は、地上のことしか考えていません。目に見えない霊的なことは、御霊を心に宿していないので見ることはできません。けれども、御霊によって新生した人々であっても、天のことはその前味を知っていても、けれどもその全貌を知るには至っていません。霊的な人はたくさんいても、天的な人はごくまれです。けれども、パウロはその栄光にあずかりました。

彼はそれを、「人間に語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いた」と言っています。人間の言語という限界の中で押し込めば、その栄光を大幅に限定してしまうことになり、それは許されないことだ、ということです。黙示録 10 章でも、使徒ヨハネが七つの雷を聞いて、それを書き留めようとしたとき、「七つの神が言ったことは封じて、書き記すな。(4 節)」と命じられています。あまりにも偉大ですばらしく、それで人間の言葉で書き記してはいけないう程なのです。

2C 聖書的

以前、天国についての話をした時に、何度か「私は天国についての幻をそれほどまでに意識できていない。」との質問を受けたことがあります。確かに信仰者であっても、天を鮮やかに意識していることは少ないかもしれません。

けれども大事なのは、「イエス・キリストがおられる所に天がある。」という事実です。イエス様は、十字架につけられる前夜、弟子たちに、天に住まいを用意して、それから戻ってくると約束されました。そして、こう言われます。「わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。(ヨハネ 14:3)」また、パリサイ人たちに対してイエス様は神の国について、「『そら、ここにある。』とか、『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中に

あるのです。(ルカ 17:21)」と言われました。主イエス様がそこにおられたら、それが神の国そのものであるということです。

ですから、イエス・キリストを知っていれば、それで天を知っていると言うことができるのです。

パウロは体験的に天を知っただけではありません。彼は聖書に、旧約聖書に精通していました。高名な律法学者であるガマリエルの下で教育を受けました。彼は初めキリスト者を迫害していましたが、実は律法や預言者が伝えているキリストはまさにイエスであることを悟りました。これが彼を驚愕させました。彼は体験以上に、律法と預言の成就としてのキリストに出会ったのです。「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。(マタイ 5:17)」とイエス様は言われました。

したがって私たちがなぜ、聖書を、そして旧約聖書を含めてしっかりと学んでいるのか？それは、皆さんがイエス・キリストご自身に使徒パウロのように出会ってほしいから、そして、この地上ではなく天そのものを自分の思いの中に抱いてほしいからに他なりません。

2B 苦しみを耐える力

私たちの地上の生活には、試練があります。また苦しみもあります。世の終わりが近づくにつれ、苦しみが増すこともイエス様は預言されました。その中で私たちがいかに、信仰に堅く立つことができるのでしょうか？祈りも大事です。特に断食も大事です。しかしそれらはいくまでも、「天」の幻に裏打ちされたものであったのです。天を自分の心の中にどれだけ抱いているかにかかっているのです。

先ほどお読みしたパウロが第三の天に引き上げられた話ですが、多くの人は使徒の働き 14 章での出来事で起こったのではないかと、と言っています。19 節から読みます。

19 ところが、アンテオケとイコニウムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。20 しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって町にはいって行った。その翌日、彼はバルナバとともにデルベに向かった。21 彼らはその町で福音を宣べ、多くの人を弟子としてから、ルステラとイコニウムとアンテオケとに引き返して、22 弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国にはいるには、多くの苦しみを経なければならない。」と言った。

なんと彼は、石で打ち殺されたかと思われるほど半死状態になったにも関わらず、その同じ町々に引き返して福音を宣べ伝えようと言っているのです！そこまでの力がどこから出てきたのでしょうか？それが、彼が生死をさまよっていた時に第三の天に引き上げられ、その恐ろしいまでの栄光の姿にあずかったからではないかと言われています。

なぜなら、その第二コリント 12 章の続きには、彼は肉体にとげを負ったという話をしているからです。彼がこの石打ちで体に致命的な傷を負ったのではないかとされています。けれどもパウロはむしろそれを喜び、「ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。(10 節)」と告白しました。

同じようにパウロは、ローマ 5 章でも神の栄光があるからこそ、患難に耐えることができることを話しています。「そればかりではなく、患難さえも喜んでます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。(3-4 節)」さらに 8 章では、「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。(18 節)」と言っています。そして、主イエス・キリストご自身が父なる神の栄光の中におられたからこそ、人として仕える姿を取り、十字架の苦しみにまで耐えることができたのです。私たちが神の子供とされたという栄光を、もう一度思い出しましょう！

3B きよめ

そして天を思うことは、私たちが地上の汚れから離れることのできる力を与えます。コロサイ 3 章を開いてください。

3:1 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。3 あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。4 私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。

思いを天に、キリストが神の右の座を占めておられることに定めます。そこにこそ、私たちの命の源泉があるのであり、後にはその栄光が私たちにも現われるのだ、という話です。ゆえに、次のように続きます。

5 ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。6 このようなことのために、神の怒りが下るのです。7 あなたがたも、以前、そのようなものの中に生きていたときは、そのような歩み方をしていました。8 しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを、捨ててしまいなさい。9 互いに偽り言うてはいけません。あなたがたは、古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、10 新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るので

お分かりになりましたね、上のものに思いを定めることによって、この世にある汚れから私たちは身を守ることができるのです。

3A 天に入る

1B 上からの誕生

そして、最も大事な質問をします。「皆さんは、この天に入る確信はありますか？」であります。天に入るために、私たちは肉の努力でどんなに頑張ってもできないことは、ニコデモという人物を通して知ることができます。彼は、ユダヤ人のサンヘドリンの一員であり、国会議員のような一人でありました。また律法を厳格に守ろうとしていたパリサイ派の人です。そして彼は老齢であるにも関わらず、30歳そこそこのイエス様に近づき、「神がともにおられるのでなければ、あなたがなされるこのようなしるしは、だれも行なうことができません。(ヨハネ 3:2)」と言いました。高德な人だったのです。

けれどもイエス様は言われたのです。「まことに、まことにあなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ 3:3)」はっきりと告げられました。ここの「新しく生まれる」は、「上から生まれる」と言い換えることもできます。つまり、天からもたらされる誕生を経なければ、神の国を見ることさえできない、ということです。

もうかなり前になりますが、インディ・ジョーンズ第一弾「失われた聖櫃(アーク)」の最後の場面にて、契約の箱を開けた者たちが、その中身を見たら、内側から溶け去るように人々が滅んでいく姿が出てきます。幕屋に至聖所に置かれている契約の箱は、いくつもの犠牲と幕という仕切りによって、そして大祭司が年に一度、犠牲の血をたずさえることによって、初めてその中に入ることができます。それでも贖いの蓋をあけることなどもっての他で、後にその蓋をあけたイスラエル人たちが大勢死んだ記録が聖書にはあります。私たちはどんなことをしても、神の栄光にあずかることができないのだ、という限界を示しています。

ですから、天にはそのままの姿で入ることは、決してできないのです。イエス・キリストを信じないで死んだ人々は、天に入ることはできず、神の裁きの御座で裁かれて、地獄に投げ込まれてしまうのです。

2B キリストの血による聖め

けれども、キリストの血を信じてください。イエス様はその流された血を、地上の幕屋の模型ではなく、天そのものに携えて行かれました。そして、その聖所をご自分の血によってきよめられました。このことによって神の御座の前に入る事が許されているのです！